



江戸と大阪 近代日本の都市起源

齋藤 修 著

NTT出版・本体価格 二五〇〇円

比較史の営為が解き明かす 日本の雇用制度のルーツ

評者 北村行伸・一橋大学経済研究所助教授

この本の目次

- 第1章 都市のサイクル——問題の歴史的背景
- 第2章 雇用の経済学と人口学——本書の視角
- 第3章 奉公人のゆくえ
- 第4章 丁稚・手代・棒手振——雇用の経済学
- 第5章 江戸と大阪の歴史人口学
- 第6章 西欧の都市、日本の都市——比較史のコンテクストで
- 第7章 明治から現代へ——連続と不連続

この春は阪神タイガースが大躍進して、セリーグの首位を走っている。それを読売ジャイアンツが急追している。両チームのファンには、たまたらなくおもしろい展開になってきているのではないだろうか。

東京デイズニールランドは日本で最も成功したテーマパークであるが、昨年開場した大阪のユニバーサル・スタジオ・ジャパンは東京デイズニールランドの持つ入場者記録を塗り替えてつづける。テレビを見ても、活躍している芸能人は関西出身か関東出身が多い。経済学界を見回しても、大阪大学を中心とした関西系経済学者と東京大学を中心とした関東系経済学者の存在感が大きい。

ことほど左様に社会のあらゆる場面で東京と大阪はライバルとして対抗している。一時期、東京一極集中の弊害が議論されたが、大阪は東京に対抗できる唯一の都市といっても過言では

ないだろう。もちろん、大阪や京都の人間ならば、太閤秀吉までは大阪が日本の中心であり、江戸時代でも経済や物資の流通は大阪が中心であったし、明治維新で東京に遷都されるまでは、日本の首都は京都であったことを強調されるだろう。東京の人間からすれば、江戸幕府以来、四〇〇年以上も日本の政治の中心は東京にあり、現在の経済活動の中心は間違いなく東京にあることを指摘するのではないだろうか。

地域と時間を自由に往来

このような二大都市を、比較史や歴史人口学の第一線で活躍する齋藤修教授が人口や雇用に関する歴史的観点から比較してみせたのが本書である。本書の扱っている問題は大きく分けて二つある。第一に、近世以後の都市化をどうとらえるのかという問題である。この問題を考えるにあたって齋藤教授は都市人

口規模とその順位をプロットした図から始める。この現象は都市経済学では長らく知られた現象であり、世界中で見出されている。とりわけ、都市順位と人口の対数線形関係の傾きがマイナスに近い場合、これをジッパ法則と呼ぶが、日本でそれが当てはまっていることを確認されている。齋藤教授は明治中期以後には都市化が進んだことがわかるが、一九世紀初頭にはまだ都市化が見られなかったことを指摘されている。さらに詳しくデータをみると、大都市の人

口は停滞し、人口三万人未満の地方都市では人口が増加しているということがある。第二に、大阪商家の奉公人雇用の内部化と江戸の労働市場における雑業者化の違いを指摘し、その違いが結婚や家族形成にどのような影響を与えたのかを検討するということである。また、これらの制度の違いが明治以後の都市化においてどのように発展していったかという点も論じられており、わが国の雇用制度のルーツが指摘されている。すなわち、大正末から昭和戦前期に始まった本格的な工業化はいわゆる二重構造を発生させた

が、大企業の雇用制度は大阪の商家奉公人制度に基づいていたこと、そして二重構造の下層の町工場は近世都市の職人社会の延長にあるというよりは、近代にな

って新たに形成されたものであること、さらに大企業、中小企業に共通する熟練への態度は、近世の農村の技術改善へのためまぬ努力にその起源があるということがある。

じつは、このような要約では齋藤教授の著書のおもしろみはほとんど伝わっていない。齋藤教授の歴史学の醍醐味は、地域と時間を自由に行き来しながら、一つのテーマに迫っていく方法にある。ヨーロッパの歴史的经验と日本の経験と比較する、日本の近世と現代を比較するという知的営為には事実発見、問題発見の効用があると同時に、現代的な要請に応えることも意味している。齋藤教授はこのように比較史の境地を開拓し、その愉しみを伝えてくれていることを強調しておきたい。興味のある方は、齋藤教授の前著「比較史の遠近法」(NTT出版)も併せてお読みになることをお勧めする。



著者のプロフィール
さいとう おさむ
一橋大学経済研究

所教授。慶應義塾大学経済学部助教授等を経て現職。主な著書に「商家の世界・裏店の世界」(リポポート)、「賃金と労働の生活水準」(岩波書店)など。